

平成16年3月21日掲載分時評

第5回時評「未来へ繋ぐTX」

日本で初めての鉄道が新橋から横浜に開通したのは今から132年前の事でした。文明開化の扉は大きく開かれ日本は近代化へとまっしぐらに進む事となりました。2005年秋、秋葉原からつくばを45分で結ぶ「つくばエクスプレス」の開通がいよいよ秒読みの段階となってきました。国家的なプロジェクトとして計画された筑波研究学園都市が生まれその役割と使命を担ってからすでに30数年が過ぎました。田園風景と国際的な先端技術を持つ研究機関の集積は他には類を見ない独特な雰囲気を街にもたらしました。そして住民による地道な街づくりへの取り組みは様々な場面で「つくばのこころ」を育んできました。研究者や生産者や学生、外国人など多様な人々によるボランティア活動やNPOなどの積極的な行動は未来につながる大きな力とも思われます。このような中、IT時代に登場する「つくばエクスプレス」はつくばに新たな活力を吹き込む象徴的なでき事と思えます。ところで、45分という東京圏への所要時間は通勤可能なイメージを一般的には与えます。しかし私はこの街がベットタウン化し、TXが東京へ働きに行くための通勤電車にならないようにと強く願います。なぜなら、つくばはIT社会にふさわしい、卓越した知の集積と固有の文化背景をすでに持っています。そして、恵まれた自然環境の中で創造性豊かに暮らせる未来型の都市モデルの可能性を秘めた稀な都市と考えているからです。

情報社会においては、企業の創造力や個人の創造性が新たな価値を生み出す源泉と考えられています。このような社会では創造の担い手である個人が主役となり、彼らのクリエイティブな発想やアイデアをかたちにできる力を企業や社会は求めていきます。アメリカでは4,200万人の人々がオフィスに限定されない形態で仕事をしています。彼らの求める価値観は、自由であり、家族であり、社会貢献の視点や仕事の中に自己実現を求めることが知られています。英国でも2006年までには労働力の30%が自宅勤務になると言われています。このようにアイデアを生み出す仕事をするナレッジワーカーの増加は欧米だけが特別なことではありません。すでに日本でもスモールオフィスホームオフィスで仕事をするSOHO人口の広がりに加え、最低資本金規制特例制度により多くのミニ起業家が誕生しています。今後多くの人々が家庭で仕事をしていくのではないかと想像されます。そのような中、つくばは自然や、住環境、食文化や教育といった積極的に生活を楽しむための環境が備わっています。これらを魅力的に表現しながらナレッジワーカーを惹きつけ、招き入れることが21世紀型の都市モデルへの試みになるのではないかと思います。生活の世界と仕事の空間が調和する街ではビジネスから流れ込むバイタリティと生活の中で生まれる交流が地域のコミュニティに多彩なエネルギーを注ぎこむと思われれます。社会的な役割や肩書きから離れ、個人として生活世界に溶け込む時、人は自分の本当にしたい事や心躍る瞬間を感じるものではないでしょうか。つくばエクスプレスが時代の精神を乗せ、人々の夢や希望を未来へとつなげる列車となることを願います。以上